地方寺院活動における菩薩思想について

大正大学 非常勤講師
鈴　木　行　賢

日本仏教は、全国各地に存在する寺院と、所属する僧侶（住職）によって維持運営されている。また各寺院は檀信徒と呼ばれる在家仏教者の布施によって支えられている。

しかし戦後60年を過ぎ、都心部の一極集中による繁栄がある一方、地方は人口が減少し過疎化が進み、場所によっては寺院活動自体が成り立たなくなりつつあるのが問題となってきている。

この危機的な状況の中、従来の檀家制度に依存する寺院もある中、従来の寺院活動に囚われず、新たな試みを起こし寺院活動に活かしている寺院も存在する。

本論では、地方における寺院活動について、一つ地方寺院活動の実態を取り上げ、仏教者としての僧侶、仏教信者としての地域に注目し、その根底に流れる菩薩思想について考察してみたい。

なお本論で取り上げる菩薩思想とは、いわゆる仏教思想としての菩薩思想ではなく、「菩薩」のあり方である「自行化他」を、寺院活動を行う仏教者、在家信者たちの根源を指すものとして位置づける事をあらかじめお断りしておく。

1，町おこしと寺院活動

①　飯野町について

今回取り上げる地方寺院は、福島県福島市飯野町にある五大院という天台宗寺院である。筆者は現在、この五大院の兼務住職を勤めている。

元々飯野町という町は、江戸時代から続く養蚕業が盛んな地域であり、明治時代以降は織物産業が盛んとなり地域経済を支え、戦後日本復興の一助となっていた。しかし中国からの安価な生糸の輸入増大に伴う織物産業の衰退と養蚕業の衰退により、過疎化が進み、近年、福島市と合併した。

福島市との合併は、行政の中心が福島市役所へと移行し、今までの役場機能の大部分が縮小され、最低業務のみが支所の仕事となる。すなわち町自体の求心力の低下を意味するのである。これにより、地域の過疎化に拍車をかける事ともなり得るのである。

さて、古来より地域の中心であったのは、寺院と神社と言っても過言ではない。なぜなら寺社は、近現代の行政機関よりも、古くからその地域に存在していたのである。すなわち神社は、その土地の開創に深く関連する由来を持つものが多いし、また寺院は、江戸時代以降の檀家制度を担ってきた事もあり、その土地と住民との間に深く関わりを有しているのである。

まさに寺院・神社は、地域の中心であり、生活の基本であり、住民と深く関わりを持っていたのである。しかし明治維新の神仏分離令や、戦後の政教分離の原則や、農地解放などによる経済的な収入の減少などを理由として、住職や神主は、寺院神社存続のため、本職の他に兼業の仕事について、それぞれ寺院・神社維持に努めるようになった[1)]。

②　五大院について

五大院は、修験道の開祖である役行者の開山と伝承され、その住職は役行者の弟子の末裔と言われ、江戸時代には聖護院門跡配下となり、小手郷地域[2)]の修験寺院の統轄を任されるほど隆盛を極めていた。

また五大院出身の僧として、張堂寂俊（龍禅子・大龍）がおり、入木道を継承するほどの書家で、中尊寺金色堂の標柱、九州太宰府観世音寺の標柱などの作品が残されている。

五大院住職は、飯野町住民の生活に深く関わりを持ち続けていた。しかし近年、後継者が絶え、住職不在となるに及び、以来 30 年の間、地域からも忘れられた存在となってしまった。

③　五大院縁日開催までの道のり

当時、飯野町では「ほらふき大会」というイベントが、町主体となって行われていた。それは参加者が「大ぼら」を吹いて、みなで大笑いしようという内容であり、毎年２月に開催されていた。そして「ほら」の中で、町政に活かせる内容を取り上げ、町長の諮問機関である「町作り委員会」[3] の中で協議して、実際に実現可能な「ほら」を町政に反映しようという流れがあった。

五大院縁日は、その「ほら」の中から生まれた。ある参加者が「町の中に五大院という寺がある。そこにお地蔵さまを建てて、巣鴨のとげぬき地蔵のようにして、町をにぎやかにしたい（趣旨）」という内容であった。この事が町作り委員会に取り上げられ、実際に行える行事として、「五大院縁日を考える会」[4] が発足し、当時住職であった筆者に連絡があり、具体的な縁日発足に備えた勉強会が行われた。その内容は、

（1）五大院住職（筆者）による天台宗寺院としての解説
（2）福島市歴史資料館（当時）藤田定興氏による「修験寺院としての五大院」
（3）福島市文化センターの先生による「五大院の仏像」
（4）地元郷土史家による五大院の解説

などである。

このような勉強会を重ねる中、五大院への理解を深めていき、五大院の本尊である不動明王の縁日である２８日を毎月の開催日と定めて、平成 13 年 11 月 28 日に、五大院縁日が復興という形で開催されたのである。

２，五大院縁日の内容

次に五大院縁日の内容について、具体的にどのような活動を行っているのか見ていく事とする。まず縁日全体の流れを見、次に縁日を直接的に支える人々、間接的に係わる人々について見ていく。

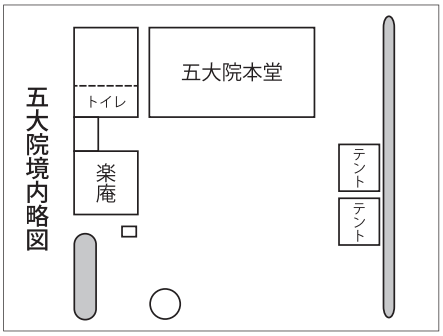
①　縁日の流れ

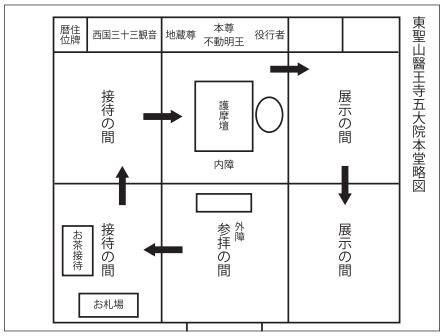
まず縁日は、不動明王の縁日である毎月 28 日に執り行われている。不動明王の護摩祈祷は 10 時・12 時・14 時の３回行われる。

五大院境内は、飯野町商店街の中央に面しており、回りには飯野町郵便局や病院・銀行などに囲まれている。参拝客は境内に至り、まず楽庵と呼ばれる受付にて、祈祷の申込みを済ませ、本堂へと入る。

本堂内においては、内陣に面する外陣に着座して祈祷を受ける。護摩祈祷を行われる中、僧侶の案内を受けて祈願木を持ち内陣へ入り、護摩の炎に祈願木を投じ、本尊に祈願を行い、外陣へと戻り、ご祈祷が終える。

その後、本堂内の部屋にて、だんご汁の接待や、抹茶の接待を受け、また堂内にて行われるイベントを見、また境内にて開いている出店などで、買い物を楽しんで、帰途へ着くという流れである。





② 縁日を直接的に支える人々

実際、縁日を支えているのは、「五大院縁日を開く会[5)]」の面々である。このメンバーが、実際の縁日の企画運営を行っている。元々は飯野町の「町作り委員会」のメンバーでもあり、分会である「五大院縁日を考える会」のメンバーでもある。

縁日の企画運営とは、縁日に際して様々なイベントを同時開催しているが、その立案と実行を意味するものである。

具体的活動としては、毎月 8 日にその月に行う企画の立案（企画会議[6)]）を行い、18 日に企画準備[7)] を行い、27 日に事前準備[8)] を行っている。

28 日当日の仕事内容は、受付・境内案内・接待など多岐に渡っている。

受付は、祈祷受付・お守りの頒布を担当し、境内案内は初めて来た参拝客の案内を行い、ご接待は抹茶・団子汁を振る舞う事である。その他にも縁日のポスターやチラシ作り、それら広告をコピーし、地域施設に張りにいくなど、縁日開催に関するすべての事に携わっている。これらの分担は、それぞれに任されているもので、自分の出来る事を自然に分担して行っている。

③ 縁日を間接的に支える人々

縁日では、護摩祈祷を行う他に、境内に出店が開かれている。この出店は、元々縁日が「町おこし」のために開始された事もあり、町内商店街の人たちが出店している。

ａ．おかみさんサミット

おかみさんサミットとは、地元商店街の婦人部の事である。普段は店を盛り立てているが、自分たちで漬け物や小物を作り、町内のイベントにも出店している。

縁日では、上記品物や季節の物などを販売し、また接待耀の団子汁の仕込みを手伝うなど、陰から縁日を支えている。

ｂ．飯野書道会

町内の書道塾の講師と生徒たちである。縁日では、本来住職が行うべきである祈祷札の願意・願主の書き込みを担当している。その他、手が空いているものは、抹茶の接待を手伝っている。また新春書き初め展では、作品展示も行っている。

ｃ．商店街からの出店

元々、町おこしとしてスタートした御縁日であるので、地元商店街から縁日への出店をお願いしている。焼きそばや、みたらし団子・五大院まんじゅうなど、それぞれ出店し、縁日を賑やかにしている。最近では、福島市内の身障者施設からの出店や、南相馬市の避難者から榊の頒布など出店参加者が増えている。

ｄ．その他

縁日には、個人的に参加して手伝う者もいる。例えば、団子汁の調理を手伝う者や自分で育てた花を飾りにくる者、茶道の心得のある者は抹茶の接待を担当し、餅つきがあるとなれば、餅つきを行い、餅を小さくまとめるなど、様々なイベントを裏から支えている。

これらの手伝いは、特に依頼をして来て貰っている訳ではなく、自発的に参加して頂いているのが特徴である。それぞれ皆と和やかに過ごすのを楽しみにしているのが理由でもある。

④ 縁日に参加する人たち

本堂内では毎回様々なイベントが開催されている。開催においては町内町外の様々な方々を招いて行っている。町内で作品作りをしている者、町外で作品を発表している者、イベント開催には、縁を結んだ人たちに依頼して、承諾を得て出展をお願いしている者や、町内の趣味の集まり（生け花・陶芸・写真・絵画など）の発表の場として提供するなど、出展の経緯は様々あるが、縁日を盛り上げて頂いている。

平成 25 年の五大院御縁日・催し物		
1 月	初不動・節分	新春書道展
2 月	桃の節句	ひな飾り・つるし雛
3 月	民話のつどい	民話の会・
4 月	端午の節句	花まつり
5 月		蛙文字と陶芸親子展
6 月		ふる里物産展
7 月		
8 月	夜の御縁日	民話の会
9 月		山野草展
10 月		
11 月	縁日 12 周年	餅つき
12 月	納不動	一年展・御縁むすび

左表は、縁日の一年間の出展（平成 25 年）を出したものである。

1 月は新春書道展として、町内書道塾生の作品展の展示を行う。また節分会として、豆まきを行っている。

2 月は町内保育園のつるし雛の作品展示である。この時期、町内では「飯野つるし雛まつり」が開催されており、縁日と相まって、商店街はたいそうな賑わいを見せる。このつるし雛も、五大院縁日のイベントとして、町内のつるし雛作家さんの展示した事が、町のイベント[9] へと発展した一因となった。

3 月は民話のつどいとして、民話を地方の方言で話をする「飯野民話の会」のイベントである。民話のつどいは 8 月にも行われているが、特に 3 月は民話の会が小学校で指導している事もあり、小学生の民話も披露されている。

4 月は端午の節句として、町内から五月人形を借り受けて展示し、保育園児の作品も展示する。園児たちも見に来て、初めて見る護摩の炎や団子汁を堪能している。また同時にお釈迦様の誕生日を祝う「花まつり」も行われており、甘茶をかけるなど普段経験できない事を楽しんでいる。

このように毎月様々な催し物が開催され、縁日を賑わわせている。中においても、保育園児や小学生の参加機会は、「縁日を見て育った」という機会を得る事となる。現在、縁日は 13 年目を迎えようとしている。10 年を越えて、ようやく地域にも根づいてきた感がある。さらに 10 年を過ぎ 20 年を迎える頃、「見て育った世代」がようやく 20 代、更に 10 年後、縁日が 30 年後を迎える時、「見て育った世代」が親の世代となり、本当の意味で地域に根ざした縁日となる。大変時間のかかる事ではあるが、「町おこし」イベントとしてスタートした御縁日が、地域になくてはならないものとなる為、今の子供達に見せていく事が大事なのである。

⑤　縁を結ぶ日

縁日とは、本尊である仏菩薩との縁を深め、その威徳と御利益に預かる日という意味である。しかし、それは人と人との御縁を結ぶ日と捉える事ができる。

縁日をきっかけとして親しくなる者、また久しぶりの再会を果たす者、様々な出来事が縁日を介して結ばれてきた。長いつきあいとなり、互いを尊重し合い、互いを支え合う場となり得るのが縁日であると言える。

人と人とを取り持ち、次世代へとつなぐ場としての「縁日」が、その地域における「町おこし」の根幹となり、その地域を形作る上での重要な意味を持つものと言える。町おこしは、地域の活性化を測るものとして、様々な手段を講じられてきた。それらは劇的なカンフル剤の役目を果たしたのであるが、一過性に過ぎず、けして長続きのするものではなかった。

五大院縁日は、参加する方、手伝う方など、たくさんの人が関わりを持って開催されている。そこには「無理のないように」「都合が悪い時は休んでも良い」という姿勢が貫かれている。お互い様の気持ちを持って互いを助け合えるよう、ゆとりを持っているのである。それこそが「町おこし」として、長年継続できる工夫でもある。

農村部においては、「結（ゆい）」という互助の精神がある。田植えや稲刈りなど繁忙期にあたっては、お互いの田畑の手伝いをする、または屋根の葺き替えを総出で手伝うなど、様々な「結」がある。こうした精神が、縁日に参加する人たちの中にも存在しているのである。

お互い様の気持ちを持って、お互いを助け合うという事は、仏教で言う所の「自行化他」の精神にも通じるものと言える。菩薩の心でもある自行化他は、仏になるための自らの修行が、そのままに他者を化導する道でもある事を示すものであるが、「結」の精神や、縁日に携わる人々のあり方にも通じるものと言える。

縁日開催から十年目を過ぎ、地域の催し物としても認知度も高まり、これから益々邁進していこうとしている中、十年目を迎え、これからという時に、あの大震災が起きた。縁日に関わる人たちは、まさにその時、「自行化他」の精神で臨んだのである。

3，東日本大震災

① 東日本大震災

平成 23 年 3 月 11 日（金）日本の根底を覆す大災害が起きた。東日本大震災である。福島県は、地震・津波・原発事故、そして現在も風評被害の直中にあると言える。

五大院縁日を開く会のメンバーは、震災直後の 3 月 28 日の縁日を取りやめ、その代わり、避難してきた人々への炊き出しを自発的に行った。それは、けして避難してきた人たちへの同情の気持ちという訳ではなく、また放射能汚染の中にいる同胞意識という訳でもない。ただひたすら「そうせねば、いられない」という気持ちで動いたのである。

その後、幸いな事に翌月の 4 月 28 日には縁日を復活させ、以来今日まで継続している。

② 飯舘村全村避難

五大院のある飯野町には、原発事故により全村避難を指示された飯舘村が避難する事となった。村役場をはじめ、住民 70 世帯の仮設住宅・飯舘中学校や、企業などの仮設施設も町内に建設された。

６月の縁日では、飯舘村復興支援第一弾として、飯舘村物産展を開き、飯舘村村長菅野典雄氏も来訪し、避難先の飯野の地にご挨拶をされた。そこにおいて、飯舘村の太鼓グループ虎捕太鼓の演奏が披露された。飯舘村からの全村避難という事となりメンバーは、福島や相馬、東京などバラバラになる事となっており、当地での演奏が最後の演奏となるはずであった。ところが東京から全国放送の取材が来て、涙ながらに演奏する様子が取り上げられ、全国に放送されたのである。それによって、全国のイベントに虎捕太鼓メンバーが呼ばれる事となり、「もう二度と会えないと思っていたのに、度々会える事となった」と喜ばれた。

③ 復興支援縁日

それ以降、縁日では飯舘村復興支援として、いくつかのイベントを開催してきた。それらの御縁を取り持ったのが、五大院縁日の関係者であった。エジプトからの応援として、ウード奏者のムスタファ＝サイッド氏が来日し、祈りのコンサートを開かれた。

その後も、サックスコンサートなど、機会を得ては飯舘村支援のイベントを開催してきた。

このようなイベントが、避難して来ている飯舘村の人たちに積極的参加を促すものではないが、遊びに来て楽しんで頂きたいという願いをもって行われているのである。

五大院縁日では、震災後３年を過ぎた今も、このように飯舘村支援のイベントを行う事としている。

④ 鎮魂地蔵尊の建立

震災後、様々な人たちが被災地支援として、現地へ赴き応援していた。仮設住宅の慰問、傾聴ボランティアなど様々な支援がなされており、現在も行われている。

そのような中、震災直後の福島県地域は、原発事故による放射能の影響を考えてか、及び腰になっている状態にあった。

また五大院のある飯野町周辺は避難する事はない地域となったが、避難指示地域とその他の地域の区分が明瞭な回答のないまま行われた事もあり、避難しなくても良いとはされていたが、不安に思う住民も多く、子供達を避難させるなど、自主避難を余儀なくされている家庭もある。このように震災直後から現在にかけて、住民の心は穏やかなものではなく、漠然とした不安の中にいるのである。

鎮魂地蔵尊が建立されたのには、上記のような背景と、不思議な御縁があって建立されたのである。

被災地への支援活動は、Twitter や Facebook などの SNS ツールを利用して盛んに情報交換されていたが、たまたま筆者が Facebook 上に掲載された天台宗栃木教区の仏教青年会の活動に触れる機会を得た。

栃木教区仏教青年会は、宮城県の被災地支援として、「みんなの図書館プロジェクト」の援助や、仮設住宅への慰問としてスティールパンコンサートを行っていた。その記事を目にした筆者が、青年会事務局霜村裕寛氏（当時）へ「飯舘村復興支援」として、コンサートをお願いできないものかと連絡を取っていた。スティールパンに関して

は、グループに参加している天台僧の西村慈祐氏と協議を行っていた。

この同時期に、地元石材店社長三浦貢一氏から、筆者にある相談事が持ち込まれていた。それは「自分たちの住む町は、たまたま避難せずに済んではいる。しかし本当に大丈夫なのかという不安がある。気持ちの中がすっきりしない。何かしたいのだ」と言う事であった。社長は地蔵尊の建立を発願し自ら地蔵尊を携え、宮城県石巻市の石巻港や大川小学校、南三陸町の防災庁舎を訪れ、供養をしてきた。また南三陸町の民宿高倉荘の主人から、南三陸町の石を頂き、地蔵尊の台座とし、さらに飯舘村産の石材を用いて台座とするという考えを持っていた。その地蔵尊には、「『震災被害に関わるたくさんの人たちの想いを乗せて、漠然とした不安の気持ちを昇華させたい』という願いを込めたい」と言う事であった。そして建立の地として、縁日で参拝の多い五大院境内を選んだのであった。

この二つの事案が同時期に起きていたのであるが、それを結びつけたのが五大院縁日であった。復興支援としてコンサートを開くにあたり、運搬要員として栃木仏教青年会メンバーが手伝いに来る事となっており、地蔵尊建立の場として五大院境内を提供する事も決まっていた事もあり、その開眼供養の法要を栃木仏教青年会に依頼したのである。

そうしたやり取りを Facebook 上で行っていたのであるが、そこへもう一人、参加を表明した人物がいた。東京で支援活動を行っている「ひとさじの会」の吉水岳彦氏であった。ひとさじの会は、東京山谷地区で支援活動を行っている団体であるが、震災直後は岩手県三陸地方への支援活動を独自に行っていた。また浄土宗の僧侶でもあるので、福島県いわき市の支援活動も行っていた。筆者とも縁があり、Facebook 上のやり取りに参加を表明されたのであった。

平成 24 年 4 月 28 日（土）の縁日には、飯舘村復興支援として、天台宗栃木教区仏教青年会のメンバー、そしてスティールパングループ「トリニスタ」のメンバー、東京からは「ひとさじの会」のメンバーが参加し、いわき市からは浄土宗菩提院の霜村真康氏も参加した盛大なものとなった。

仏教青年会はご祈祷の手伝いをされ、ご祈祷の合間にスティールパンコンサート、ひとさじの会メンバーは、チョコフォンデュの接待にバルーンアートを行った。午前と午後と 2 回コンサートは行われ、土曜日ともあって大勢の子供達も参加し、大いに賑わった。

3 回目の護摩祈祷を終えて、最後に鎮魂地蔵尊の開眼法要が、天台宗栃木教区仏教青年会によって執り行われた。会長菅原道信師導師の下、地蔵和讃の詠唱、開眼法要が執り行わる中、参加したすべての人たちの焼香が行われ、鎮魂地蔵尊は開眼された。

地蔵尊の建立由来記には、次のように彫られている。

> 鎮魂地蔵尊建立由来記
>
> 鎮魂地蔵尊は、平成二十三年三月十一日の東日本大震災による津波被害の犠牲者、原発事故を由来とする犠牲者、そして犠牲となったすべての精霊をお導き頂く為に、五大院を結縁の地と選び、勧請されました。地蔵尊は当地に鎮座する前に、宮城県石巻市、南三陸町を巡錫し、その御霊をお慰め申し上げ、更には犠牲者を出されたすべての町と縁を結ぶ為に、南三陸町と飯舘村産の石を台座として用いました。
>
> 地蔵尊は六道のすべての命を導く能化の尊です。
>
> 願わくは、地蔵尊の大慈大悲の誓願の力を恃み、震災被害者の想い、震災犠牲者の想い、引いては建立に関わるすべての人たちの想いを、その御手に乗せて平安ならしめ、すべての縁を結びし人々の願いをも叶え、現世未来世にも、利益を廻し給わんことを[10)]

地蔵尊の建立も、1 のようにたくさんの人たちの縁を結ぶ形で実現されたのであった。

六

⑤　まとめ

鎮魂地蔵尊の建立もまた、縁が縁を結んだ形で成り立ったものである。

それは筆者自身のそれまで結んできた縁が、五大院縁日という場で、本来ならば結びつかない縁を引き寄せ、思いがけず鎮魂地蔵尊建立という縁を導き出したのである。

伝教大師最澄の言葉として、「己を忘れて他を利するは慈悲の極なり（忘己利他　慈悲之極）」という最澄の菩薩観を表す言葉がある。

震災後1年という中、風評の飛び交う中、参加したメンバーには、忘己利他の精神があると言える。県外から多く参加して頂いた事は、原発事故という目に見えぬ不安の中にある地元に住む人たちを大いに勇気づけるものである。地元民にとって外からの応援は、心強くさせてくれるのである。

4，縁日という考え方と、菩薩思想

縁日は、不動明王の縁日である28日に毎月（年12回）行われている。

縁日とは、本来、仏との縁を深める日という意味であるが、五大院縁日では「人と人を結ぶ縁結び」でもある。1年の締めくくりである「納めの不動」の縁日では、1年を振り返る「一年の歩み展」が開かれる。そこでは1年間を通して行われたイベントのポスターなどを展示し、「御縁結び[11)]」として「おむすび」が振る舞われる。1年間を振り返り、初めて縁を結んだ人たち、縁を深めた人たちとの交流が、新たな縁を引き寄せる事を実感するのである。

また五大院縁日では、「五大院縁日を開く会」のメンバーが、それぞれ担当部署を受け持っている。それはメンバーの得意な分野であり、受付・お茶の接待・案内・ポスター作りなど、仕事は多岐に渡るが、自然とそれぞれの性分に合った場所に収まるのである。

また手伝う人も、参拝する人も、それぞれ皆知り合いでもある。その日にお参りすれば、また逢える。人と人との縁を深めるのが、縁日なのである。

「お互い様」の精神と「結（ゆい）」の精神には、菩薩のあり方である「自行化他」に通じるものがあると言えるのではなかろうか。五大院縁日を「自行化他」の視線から見つめると、参加する人たちに根づく菩薩のあり方が見えてくるのである。

5，小結

以上、地方寺院における寺院活動「五大院縁日」を取り上げ、その諸相を通じて菩薩行の実践の側面として見る事ができる。その活動は「町おこし」という活動の基礎ではあるが、その底流には「自行化他」という菩薩のあり方を無意識ながら実践していると言えなくはない。

伝教大師最澄の言葉に、「己を忘れて他を利するは慈悲の極みなり」とある。また「東においては君子といい、西においては菩薩という」とある。彼等の行動は、まさしく菩薩の精神で行っていると言える。

菩薩のあり方は、「自行化他」の実践にあると言える。自ら仏道修行を行いつつ、他方、衆生を化導する慈悲の実践である。縁日に関わる人々のはたらきは、無意識ながらも菩薩行を行っていると捉える事ができよう。

天台教学には「無作」という考え方がある。それは仏事（仏道修行の実践）を意識せずに、しかも自然に行う事ができる事である。修行という形ではなく、生活の中に深く関わりを持ちながら、自然のままに菩薩のあり方を実践する事、これが縁日に関わる人々の中に、見えてくるのである。

註

1）戦後、寺院・神社の住職神職は、教職に就くなどして糊口を凌ぐ事となった。また規模の小さい寺院神社の住職神職は、廃寺廃社（法人解散）して、帰農してしまう事も多かった。

2）小手郷地域……出羽三山開山蜂子皇子の母である小手姫に由来する。福島県旧伊達郡川俣町・飯野町・月舘町と福島市小国地区を含む一帯の古称。川俣町秋山地区にある女神山を中心とした地域。小手姫は、子を慕って東北地方へとやって来て、この地で亡くなられ、女神山に葬られたという伝説がある。小手姫は養蚕の技術を伝え、この地域における養蚕の神としても信仰されている。

3）町作り委員会……飯野町民有志によって組織される飯野町の諮問委員会。「ほら吹き大会」の内容を検討して、実現可能化を考え、町政に活かす目的があった。

4）五大院縁日を考える会……町作り委員会の分会。発足後、五大院に関する歴史・文化・人物などを研修し、五大院縁日の準備段階を支えた。

5）五大院縁日を開く会……元々は「五大院縁日を考える会」に参加していた人たちであり、そのまま移行したのである。これは「考える会」が町の諮問委員会の位置づけとなるので､そのままでは政治的な問題があるので、独立した形を取ったものである。

6）企画会議……毎月 8 日夜、五大院本堂にて行われている。28 日に行うイベントを決め、関係者との折衝や、何が必要なのかなど、細々した段取りを決める。

7）企画準備……毎月 18 日五大院本堂にて行われている。具体的にはその月に行うイベントの段取りを行う事である。具体的にはイベントを依頼する相手との諸連絡を行った上で、前日 27 日にどう手配するかなどを決め、担当者を決める。担当者は、予定のつく者が都合して担当する。
また縁日の旗指物を境内に立てるのも、この日に行われている。

8）事前準備……縁日前日である 27 日に行われる。本堂の掃除や境内の掃除、境内ポスターの準備、イベント作品の借り入れや展示など、28 日当日に間に合うように動く。

9）町のイベント……五大院縁日のイベントとして開催された「つるし雛展」がきっかけとなり、飯野町商店街の女性陣が「つるし雛」を作るようになり、「飯野つるし雛まつり」という町内のイベントとなり、毎年 2 月末～3 月初旬にかけての行事となった。今年（平成 26 年）にて、第七回を数える。

10）鎮魂地蔵尊建立由来記……五大院境内に建立された鎮魂地蔵尊の台座に彫られている銘文。撰文には筆者ならびに、大正大学講師霜村叡真師の指導を得ている。また鎮魂地蔵尊の台座には、宮城県南三陸町の青石を台座とし、さらに参拝者が休めるように大きな自然石と銘文の彫られた四角い石をしつらえている。この自然石と銘文石には飯舘村産の石を用いられている。

11）ご縁結び……「おむすび」と「ごえんむすび」をかけたもの。